

10

process in
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35 (以下、本展) を通じたこれからの建築展のあり方と、本展の存在を考察する。



10年前、U-30として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家や、出展者の一世代上の建築家と議論し、あらたな建築の価値を批評し共有するために招集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国の地方区分で影響力を持ちはじめ新たな活動をされていた建築家・史家である、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志、九州地方の塩塚隆生。中部と四国を除いた日本の6地域から集まり、開催初年度に登壇した、三分一、塩塚など1960年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに1970年代生まれの建築家・史家を中心となる。3年後の2012年には、8人の建築家(五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、2013年より、芦澤竜一、吉村靖孝)と2人の建築史家(五十嵐太郎、倉方俊輔)による現在のメンバーにより開催を重ね、7年が経つ。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約10年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、この10名が集まった4年目の開催の際の、藤本の「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーが位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家と出会ったのは開催前年度の2009年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家から候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりの全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に出向き、27組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表とする出展者7組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しながら、自薦による公募を開始するものの、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、オーガナイザーを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式であった。また海外からの応募もあったことから2011年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり1年目は完全指名、2年目の2011年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催5年目の2014年である。完全公募による審査をはじめた初代・審査委員長を務めた石上が、自らの年齢に近づけ

対等な議論が交わせるようにと、展覧会の主題であった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 5 年が経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。つまり公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、はじめてのゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」と評した結果は記憶に新しい。しかしこれが大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」が、隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年の出展者としてシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢もそうだが、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けているのが、本展のあり方のようだ。そして本展は 2020 年度の開催で 11 度目を迎える。

この出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共にシンポジウムのメンバーと位置づけてきた 10 名が一同に揃った昨年の開催後に場を設け、開催 10 年目を迎えた今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、一昨年度より第 1 回目の開催をはじめ、昨年の審査委員長を務めた平田晃久と、今年、2019 年開催の審査委員長を務めた倉方俊輔、そして来年の審査委員長を務めることになった谷尻誠を中心に、第 3 回目の「10 会議」を開催した。



——— それでは、昨年に引き続き、「10 会議」をはじめさせていただきます。昨年の審査委員長を務めた平田先生と、今年、2019 年開催の審査委員長を務めた倉方先生、そして来年の審査委員長を務めていただくことになった谷尻先生を中心に、この 2 年お休みが続きました藤本先生に多くの議論の焦点を合わせ、来年に向けての第 3 回目の「10 会議」を開催いたします。開催当時より本展の当番をしてくださっている平沼先生、本日も進行の補足応答をどうぞよろしくお願いいたします。あらためまして長時間にわたり、本日も大変お疲れさまでございました。10 年目の U35 2019 記念シンポジウムをただ今、終了させていただきました。まずは今年の出展者を振り返り、印象をお聞かせください。本年の出展者の選出から GOLD MEDAL の審査委員長を務められた、倉方先生よりお願い致します。

倉方：今春に選考しました 7 組の出展者選出では、これまでの価値にないような新しさを感じさせる考え方が存在するという事と、設計時や竣工した建築にそれなりの強度を感じる事の 2 点で出展者を選びました。結果的に今日、あらためて展示を見て安心していたのですが、多角的に面白い展示手法が並んだものになっていて、とても良かったと思っています。特に各出展建築家の思想は、ディテールや素材の表現に属されますが、原寸でモックアップを展示されたり、コンピューターを使ったり、様々な見せ方の差異にもなっているし、一般の来場者が観ても、切り口の差に気づき、分かりやすさが同居する展覧会になっていたというのが感想です。それは運営スタッフの皆さまをはじめ、非常にご苦勞があったのではないかと想像しますが、グレードを高め合った出展者たちと、AAF の関係者に深く感謝しています。

——— 倉方先生、約 1 年間、審査委員長のお役目に深く感謝申し上げます。そして昨年、今年とシンポジウムの発表形式を修正致しました。来年に向けて、このプログラム修正の効果を振り返って教えてください。こちらは昨年の審査委員長を務められた平田先生よりお話しください。

平田：僕たち建築家は、作品としての完成度を重視してしまうのですが、さすがに史家はそういう見方を一旦置いて、議論のフィールドをつくる観点で選ばれている印象をもちました。だから今日のシンポジウムは倉方さんが選んだだけあって、ネタに事欠かなかった印象で、議論がとても楽しかった。同時に、だからこそ一人ずつ推す人を限定して選ぶのが難しかったですね。そしてシンポジウムの発表形式は、これまでで一番、良くなったと思いますし、これで比類ない特徴のある開催となりました。もし、ひとつだけ言うなら、最終の議論の時間が短くも感じました。もう少し議論の時間を調整しましょうか。

倉方：今年の出展者が特に議論型だったから短さを感じたと思います。

平田：もしかすると全体のプログラムのうち、僕たちの近況の挨拶を省くことでも良いと思うのですが、いかがですか。

平沼：それは開演すると、もう誰かが壇上に座っているということですか（笑）。

倉方：壇上に誰だか分からない人たちが座っている。最後に 10 人が載っている写真くらいは見せて、こちらが誰で、あれが誰、みたいな紹介をするの？

平田：（笑）いや、壇上に上がる際にプロフィールの写真が出ている間に登壇する程度にする？

倉方：もう登壇セレモニーみたいじゃないですか。

平田：一応、何かがあっても良いんじゃないかな。

倉方：発表のあと、講評の時間というのはやっぱり必要ですよ。

平田：一昨年の発表が連なる形式から変更して、昨年から一人ずつ質疑応答する講評の時間をつくりました。今は 5 分発表で 9 分議論です。じゃ、そこをやめちゃって全部議論に回す？

藤本：僕がいないうちにそういうことになっていたんですね（笑）。でも発表と質疑応答の形式は良いじゃないですか。

平田：そうしないと、一度も言及されない人がいて、壇上で結構、残酷なことにはなるような気がしたのです。そういう配慮までしなくてもいいかもしれませんが。

一同：うーん。

倉方：今回は本当に、出展者自身たちが有機的に繋がる内容になりましたからね。

平田：もっと議論したかった感じはありましたし、これまで毎回、この場で修正をしながら少しずつ変えてきていますが、一昨年から推薦枠が発動され、昨年より今年のシンポジウムでは結構、喋れる人たちが出てきた。今年の出展者たちが、特別そうだったのでしょかね。

倉方：話し過ぎて、進行をどうしよう？と、躊躇させられました。

一同：アハハ（笑）。

五十嵐太郎：司会進行者としては確かに戸惑う反論ができましたね。

石上：今年、僕たちは逆に、少し押され気味でした。

平沼：そう、押しに弱い石上純也が見られましたね。

一同：わはは（大笑）。

平沼：僕たちにとっても良い時間を共有できましたし、そろそろやってくる次の時代は上が全て与えるものでなく、次の時代を担うものたちが自分たちの工夫でつくるものですから、ファウンダーの僕たちはそれを楽しみに、ある意味、本展への出展者の議論の凄さを悠々と待ち構えていたらいいのではないかと思います。もう一年、今年と同じ形式で進め、様子を伺わせてください。



—— 昨年、第1回目の「10会議」が発足され、本展のあり方を議論させていただく場から、出展者の選出方法に他薦である推薦枠を追加し、1 他薦・推薦枠、2 自薦・公募枠、3 シード・指名枠の3枠といたしました。本年と来年の10名による選出者は、下記に記載しています。

【2019年推薦】審査委員長：倉方俊輔

- 01. 五十嵐太郎 ● 柿木佑介 廣岡周平 | パーシモン+ヒル
- 02. 倉方俊輔 ○2019年 審査委員長のため不選出
- 03. 芦澤竜一 ● 佐藤研吾 | KOROGARO
- 04. 五十嵐淳 ● 武田清明 | 武田清明建築設計事務所
- 05. 石上純也 ● 津川恵理 | 津川恵理建築設計事務所
- 06. 谷尻誠 ● 中尾彰宏 斎藤慶和 | STUDIO MOVE
- 07. 平田晃久 ● 山田紗子 | 山田紗子建築設計事務所
- 08. 平沼孝啓 ● 岩瀬諒子 | 岩瀬諒子設計事務所
- 09. 藤本壮介 ● 百枝優 | 百枝優建築設計事務所
- 10. 吉村靖孝 ● 秋吉浩気 | VUILD

【2020年推薦】審査委員長：谷尻誠

- 山道拓人 千葉元生 西川日満里 | ツバメアーキテクツ
- 勝亦優祐 丸山裕貴 | 勝亦丸山建築計画
- 山口晶 | TEAM クラブトン
- 宮城島崇人 | 宮城島崇人建築設計事務所
- 葛島隆之 | 葛島隆之建築設計事務所
- 2020年 審査委員長のため不選出
- 松井さやか | SAYAKA MATSUI ARCHITECTS
- 榮家志保 | EIKA studio
- 山田紗子 | 山田紗子建築設計事務所
- 板坂留五 | RUI Itasaka Design office

上記の他薦・推薦枠より2-3組、自薦・公募枠により2-3組、前年のGOLDMEDAL受賞者とTOYO ITO PRIZE受賞者（隔年）のシード枠により1-2組＝計7組

●2019年 Gold Medal 受賞 シード枠出展候補者 秋吉浩気

●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長：谷尻誠による選出数とする



平沼：来年の審査委員長は谷尻さんです。今年から皆さんへ事前をお願いをして、来年の推薦枠の候補者をいただいたのです。もちろん会ったこともない方もかもしれませんし、作品や活動の取り組み、設計手法に興味を持たれて、ご本人のことを知らない方を推薦されているかもしれません。

谷尻：なるほど。来年はどうぞよろしくお祈いします。ちなみに今回からなぜ、事前に各推薦者をあげたのですか？議論するためにですか？

平沼：ひとつはそうです。でももうひとつの理由は、来年の出展者公募の期間がこれまでの2月末より、1月末へ1ヵ月早まりました。理由としては、7組+2組程度の補欠を選出していただいて、追加の資料と情報をいただく期間を設け、影響力が始まった本展だからこそ、慎重に出展者を選出するのが意図です。また、このメンバーで共有できるのがこの場でしかありませんから、簡単にでも事前に知ってもらいたく思いました。そして応募する方たちも、他薦なら「どうして選ばれたのか」を知っておく機会と、自薦の公募枠の応募者ならどういうメンバーが推薦枠で出てきているのかを事前に周知するためです。だから一番の理由は、来年に選考される応募者たちと共有したいという所です。

石上：なるほど。このタイミングはいいことなんですが、今年の出展者のことを考えていて、僕はそこまでちゃんと調べてないかもしれないです。

平沼：いや、石上さんは毎年、実はとっても選出するのに相当、慎重ですから大丈夫ですよ！

一同：（大笑）

五十嵐太郎：毎年、アンダー35で候補者を10名で挙げていくと、推薦したい人が減ってくるイメージがあって正直キツイなぁという部分がありました。今年の吉村さんが秋吉さんをあげたように、既に一度、候補者に選んで落ちてしまった人を選ばないといけなかな、と思いつつも、「ツバメアーキテクツ」というユニットがまだ、アンダー35だと気づいて選びました。彼らは卒計の頃、1986年生まれということで、g86というグループを東工大で作っており、それで名前を覚えました。佐藤敏宏さんという面白い建築家が福島にいますが、彼と一緒に、福島の避難指定地域が解除された地区で、古材を活用した民家のリノベーションプロジェクトをやっている、そのプロジェクトに応募時に出してくれるかどうか分かりませんが、個人的に興味があります。あとツバメアーキテクツのパート

ナーに石樽督和さんがいて、建築史の研究者です。

石上：あー、そうそう。僕も知っています。

五十嵐太郎：そう。建築の歴史の人が、地域再生や建築のリノベーションをやっているということは、どういうことなんだろう？という興味から選びました。

AAF：ありがとうございます。続きまして倉方先生、お願いします。

倉方：はい。「勝亦丸山建築計画」はリノベーションを中心に取り組んでいるユニットです。施工者とコラボレーションしたり、施主側を共同で運営したり、またその中に、また別のチームを入れて構成したり、活動の進め方が面白そうです。ただ、最終的にできあがったものが、まだちょっとよく見えてなくて、どこまでいけるか見えてないところがあるけれども、きっと今、想像している以上の内容を出してくるはず。元気が良いし、応援したいとも思って選びました。

AAF：ありがとうございます。続きまして、芦澤先生お願いいたします。

芦澤：はい。神戸でやっている設計施工のチームで、イギリスのアッセンブルのような感じなのかなあと考えています。実は僕も直接は知らなくて「TEAM クラプトン」という少しふざけたユニット名なんです（笑）。



一同：あはは。（笑）

芦澤：だからでしょうか、屋台や DJ ブース等の設計施工をしています。いわゆる非建築的なものにも取り組んでいて、あまり建築のことを語っていないようなんですが、来年の審査委員長が谷尻さんだから、もしかして選出されるかもと思っています。今年は佐藤さんを推薦しましたが、建築の拡大解釈を議論するにはちょっと物足りなかったように思いました。クラプトンには、違う意味のより幅を持たせた期待をして、吉と出るか凶と出るか全く分かりませんが、推薦させていただきました。

平沼：ちなみに、この推薦枠制を設けることになって、芦澤さんの推薦が唯一、100% 出展を決めています。

芦澤：目の付け所が良いんですね。

一同：（笑）あはは。

平沼：自分への厳しめに？

一同：わはは。

平田：自分でも言っている。

平沼：今年はゴールドメダル賞ですかね。

芦澤：彼らのウェブを見ていたら楽しければ良いと書いていて、「え、えー？こらっ」と思ったんですが、その辺りはもし選考に残りシンポジウムに出てきたら叩いてあげてください。楽しい事が大事だっていう意図がわからず・・・すみません。

AAF：ありがとうございます。続きまして、五十嵐淳先生お願いいたします。

五十嵐淳：「宮城島」さんは今札幌で設計をやっていて、塚本さんの研究室を出た人です。北海道

には東京からの出戻りなんです。北海道は語れる人が若手も含めて少ないのですが、彼は一生懸命に誠実に建築と向き合っていて、自分の仕事の中でいろいろと考えた作品がいくつかできています。今年も再度佐々木さんを推したかったのですが、地元・北海道から一人、推してみようかなと思いました。

AAF：ありがとうございました。続きまして石上先生お願い致します。

石上：あ、ちょっと待ってください。

平田：いま、調べ直している（笑）。

一同：あはは（笑）。

AAF：それでは先に、平田先生からお願いしてもよろしいですか。

平田：はい。僕は昨年、藤本事務所出身の山田さんを推薦していたのですが、今年は藤本さん自身が山田さんの推薦を先にされたので、僕が審査委員長の時に公募してきて落としてしまった自分の事務所出身の「松井」さんという人を推薦しました。彼女はうちの事務所にいる時はかなりセンスがあって面白いところがあったことを記憶しています。これをきっかけに推してみようかと推薦しました。



五十嵐淳：東京にいる人ですか？

平田：そう、東京です。一時期 YGS-A の助手をやっていた人です。

五十嵐淳：あっ、伝説の「みんなの家」を書いた人でしょうか？

平田：そうです。

AAF：ありがとうございます。続きまして平沼先生お願い致します。

平沼：はい。この展覧会をやりはじめた初回の 10 年前に、大西さんが出展され始めたことを思い出して、2 年連続で出展をされた後に事務所に入り、今の o+h を支え番頭をされてきた「榮家志保」さんを推薦しました。

藤本：おお、榮家さん。独立されたんですか？

平沼：現時点では管理建築士は取得され、o+h のパートナーと並行して個人の事務所を年明けに立ち上げる準備をしているようで、応募締切までに独立が間に合いそうだということです。2 年ほど前から個人で設計監理をされた住宅があがりそうですので、それを引っ提げて応募してくると思います。応援をしてあげてください。

藤本：そうなんだ。それは楽しみです。

司会：ありがとうございます。続きまして藤本先生お願い致します。

藤本：はい。自分の事務所出身で恐縮ですが、「山田」という方です。この間、自分の自邸ですかね、むちゃくちゃ思い切りが良い住宅をみせてもらったのけぞりました（笑）。そういう思いっきりの良さを持ちながら、多分まだ自身ではきちんと言語化できていない部分があるのが、逆に面白いのかなと思いました。

平田：藤本さんにはまだ現地に来てもらえてないって言っていましたよ（笑）。

藤本：そうそう、まだ現地には行ってないです。写真を見たときに単管で組んでいる！ってね（笑）。

AAF：ありがとうございます。続きまして吉村先生お願い致します。

吉村：「坂留五」さんです。彼は中山研の出身で、修士設計を西澤徹夫さんと組んで淡路島で竣工したという人です。僕が実際に見たことがあるのは、LIXIL のコンベドトイレの設計をやっていて、多視点アクソメを描いていたような、ちょっと変わった表現をする人で興味を持ちました。思い返してみると修士の頃、トウキョウ建築コレクションの審査で吉村賞をあげたということを思い出して推薦しました。

AAF：ありがとうございます。

平田：石上さんの番がきましたよ（笑）。

一同：あはは（笑）。

AAF：よろしいですか？それではあらためて、石上先生お願い致します。

石上：名古屋工大の出身で、栗原健太郎さんと Studio velocity のところにいた人です。最近、「住宅特集」で倉庫のような住宅をつくった誌面を見たことを思い出して推薦しました。つまりその倉庫みたいなのが良いなと思って、ちょっと話を聞いてみたいと思いました。「葛島隆之」さんです。

AAF：ありがとうございました。続きまして、本年と来年の審査委員長の倉方先生、谷尻先生から、来年の開催の議論をはじめさせていただきます。上記の他薦、推薦枠より 2、3 枠、自薦、公募枠より 2、3 枠、今年ゴールドメダル受賞者の計 7 組です。

平沼：補足ですが今年は、倉方さんは指名から 4 組選んでいます。公募から 3 組、昨年のゴールドメダル受賞者の中川さんは、お子さんが生まれたばかりで、指名枠を使われませんでした。それで今日、秋吉さんが司会者からコメントを出されて嫌な顔をされていましたが、どうされるでしょうかね。

倉方：そう彼は、来年、出されますかね？

藤本：彼ら次第ですが、シードを出さなくても良いしね。推薦枠や今日のゴールドメダルを逃した人からまた翌年、推薦枠で選んであげれば良いし、出したいと言わないと取り下げになっちゃうような仕組みにしませんか？（笑）

一同：あはは。（笑）

谷尻：選出は募集時期に集まった応募資料を一組ずつ選考しながら、来年の出展者を自薦、他薦の中からのおよその定数で選んでいくということですか？

倉方：そうですね。その時に選出の理由なども話しながら平沼さんとの誌面用の対談で決定してもらえれば選考の理由を共有できますね。

谷尻：わかりました！

——— 今年 10 度目の節目を迎えた展覧会となりました。あらためて展覧会そのものの応募規定は、35 歳以下という年齢基準でこのまま継続してもよろしいでしょうか。

藤本：35 歳に引き上げたのは結果として良い成果につながりましたね。僕たちの年齢も上がってきたことも重なり、出展者たちが若手でありながらも成熟して、思考も実物もでき始め、かなり出展の質が良くなった印象がありました。





平沼：実は U-30 を 4 年開催して、そして今年で U-35 を 6 年開催したことになります。もう一度この辺りで U-40 ！ っというのも議論しておきませんか？（笑）

藤本：おお（笑）。

平田：拗らせ、ややこしいことを言い出し、しかも逆にどうなるか分からない人たちかもしれません。

一同：アハハ（笑）。

倉方：そうだね。ちょっと拗らせた感じになっちゃう。35 歳以下にはまだ新鮮さがありますよね。

谷尻：若いからと許せた発言が、U-40 だと許せなくなったりしそうですね。

一同：わはは（笑）。

五十嵐太郎：そうそう、今日の佐藤さんが 39 歳だったら、ちょっとねえ。

谷尻：お前らそれで 40 歳なの？ 社会的にも大丈夫なのか？ みたいな、違うゲームになっちゃいそうですね。

平沼：なるほどね。それでは次の 5 年も U-35 のままで継続していきますね。

藤本：はい、これで良いと思います。

一同：はい。

——— 本展のような建築展を継続的に取り組む意図のひとつとして、今後の建築展の在り方を議論し、実験的に取り組んでいきたいと思います。昨年、50 万人を超える程の「建築の日本展」に関わられた倉方俊輔先生、「インポッシブル・アーキテクチャー」展に関わられた五十嵐太郎先生より、どのように建築展の在り方を模索していけば良いかお話しただけないでしょうか。

倉方：この展覧会は関西の玄関口、そして大阪の一等地で開催されています。私としてはできれば、ポピュラー化したいというか、深い内容でありながらも会場に来てもらって迫力があったり、まだ見ない表現があったり、そういう感動のある前衛性と大衆性を両立させるような展覧会の試みとして建築展を続けていくことが建築界全体にもよい影響を与えるんじゃないかと思います。

五十嵐太郎：「インポッシブル・アーキテクチャー」の展覧会で、日本のプレスはそこまではっきり書かないんだけど、海外のプレスが割と正確に意図を読んでいました。「この展覧会はザハ・ハディドと設計 JV による新国立競技場案の展示が目玉になっていて、国家が決めたことに対して反逆している」と。そういう意味で本当にあれを落として良かったの？ みたいな問いかけが実は重要なテーマです。実際に展示をみた人も結構インパクトを受けているので、やはり問題提起的なものがこの U-35 にも生まれたら良いなと思います。だから今回、そういう意味で言うと、完成度が高いものよりも問題提起的なものが最後、議論に残って、その中からゴールドメダルが出たのでそれは良かったんじゃないかなと思います。うまい人を選ぶというより、問題提起するという感じの展開は良かったと思います。ぜひそれが次回もあると良いのではないかと思います。

平沼：批評性と作品性の結びつきを建築展で示したいですね。その上でこの会場での開催は、5 年後の 2024 年まで開催予定を進めていただいているのですが、開催をはじめた 5 年前より目標数値に出ていました 1 万人の来場を、そろそろ実行数値として紳士協定のように目指さないといけなくなってきました。そして毎年、1 千人ずつ増やすような計画案をお聞きます。つまり 5 年後には、1.5 万人を目指していかないといけません。それまでの南港と違って、大阪駅前という地方を代表する商業地で継続する宿命であるようにも感じています。もちろん僕は決してネガティブに捉えてはいなくて、この数値をきっかけにして、社会にとっての建築展としてのあり方を探りたいと思っています。



吉村：今の開催期間は、11 日間でしたか？

平沼：はい。つまり 1000 人 / 日が目標です。梅田を含めた大阪駅の 1 日あたりの乗降者数は世界第 2 位の数だと施設側からお聞きしています。

吉村：ひい・・・恐らく相当な数を求められますね。

五十嵐太郎：厳しい数値ですが、それをみんなでもう少し、積極的に考えないと次も同じだと思います。今までの実績ではどのくらいだったのですか？

平沼：昨年は 7,800 人程でした。昨年は隔年の伊東豊雄さんのシンポジウムがあった年でしたし、毎年少しずつ認知されている効果は感じています。今年はそれ以上の見込みではありますが、結果的には同数程度だと予想されています。

倉方：あと 3,000 人くらいだとすると、約 1.5 倍を目指さないといけないということですね。

平沼：はい。今年は例年にも増して、昨年に大阪市営の地下鉄が民営化のメトロになったことから規制が少し落ち着き緩められたおかげで、減免枠のポスター掲出を地下鉄の主要駅でやっていただけました。あとこの館、グランフロント大阪の方たちがご協力くださって、通路などにもポスターの掲出をしてくださったり、図録を購入するとおれなく入場券を付けたりしました。伝言ゲーム

のように会場に来て観てくれた方が、良いことも悪いことも語ってくれるような、広告塔になってくれればいいなと思って、しばらくこの世代でも広報協力をお願いしていました。

倉方：なるほど、分かりました。確かにそうやって地下鉄のポスターとか、建築の設計者以外の人にもリーチしないと、なかなかその数は難しいですね。我々の SNS や大学経由でも限界がありますが、どうやって一般の建築に興味をもつ人に認知していくかですよね。どうということが考えられるかなあ。

五十嵐太郎：社会が興味をもつネタ、例えば今の関西だと万博関係の内容を入れると、人は惹きつけられると思いますが、あまりにも唐突過ぎますかね。

吉村：これまでに展覧会やシンポジウムへ来場された方たちのリストへの呼びかけはありますか？

平沼：展覧会への来場はなさそうですが、シンポジウムなど事前申し込みが必要な事業で登録してくれた方たちには、主催者からメール配信を定期的を送ってもらっています。

吉村：なるほど。それと告知は会期よりもっと前から仕込まないと、中々、来ないのかな。どれくらい前から仕込まれていますか？

平沼：毎年、約半年前の 5 月を目途に仕込みをはじめているようです。

吉村：ああ、やっぱりそんな前の時期からやっているのですね。

平沼：はい。図録の出版が 6 月 1 日だから、5 月中頃には本が全国の書店に並んでいるのとその都度、チラシやポスター、DM ハガキやメール配信などで、定期的に周知をしています。

吉村：それは定期的に配信されているんですか？

平沼：U35 の事業に限ったことではないのですが、AAF から月 1 程の配送作業をやっていて、1 回あたり 1 ~ 3 万枚くらいの定期的な案内先に、情報を流してくれています。

五十嵐太郎：さすがにこの 10 年。今日のシンポジウムのように開催すれば一番入るといって、だん



だと盛り上がりながら継続している裏側には、ひとつの大きな潮流が生まれる、完璧で繊細な仕組みがありますね。

吉村：うんうん。今日のシンポジウムに来ていた来場者の年齢層を見ても、やはり学生を含む若い人たちから人気があって、圧倒的に U35 を目指す人が多くなるように感じていました。

平沼：そうですね。U35 としているとその年齢より上の世代が下世代の取り組みを斜めから見たり、または知らず知らず見ないような潮流もあるように言われます。特に日本を含むアジアの特徴のように聞きますが、上世代を巻き込もうとすると、ここの年齢をあげることが一番早いと僕はよく言われています。

五十嵐太郎：なるほど。じゃあ、U-36 にしますか。

一同：わはは（笑）。

吉村：満 35 歳みたいな。

五十嵐太郎：タイトルを変えるとまたメディアの広報を一から始めることになるので、浸透させるのが大変なんですけどね。

吉村：来る人の年齢層をあげたいということなんですか？

平沼：いや、人数だけの問題です。批評を有する建築が人に求められているかどうか。

吉村：人数なら告知や周知の協力先もむしろ、インスタグラムやフェイスブックなど、SNS メディアに告知する方が安直に効くと思うんですよね。若い年齢層の情報収集がほぼ SNS に委ねられていることになっているのも事実ですから、メール配信や SNS 上の告知の方が集客に関しての効果が見込めそうですね。

平沼：今の時代性の強い SNS からの効果は、非常に大切に思っていますし、逆に建築界という高年齢化している情報普及速度の低い年齢層が多いですから、ひとつのキャリアに偏らずに、ポスターやメール、ハガキなども含め、価値を均質に周知していくのが、親切心のある伝達方法なのかなと思います。

倉方：なるほど。これだけの顔ぶれの建築家と史家が毎年いて、これらを見たいという学生から今の 40 代までも多いでしょう。例えば、来年の審査委員長の谷尻さんに、翌日、講演会をやってもらうとか、上世代でできる何かをつくることで、また U35 の世代にも興味をもって貰えるきっかけになるような気がします。つまり 35 歳～45 歳の年齢層には、若手への展覧会という趣旨を変えずに補える。

吉村：そうですね。建築家の後進を思い、ここにいるみんなが毎年、ほとんど休まないできていることも、人が集まってくれる大きな理由のひとつなのかもしれません。

平沼：そういうことですよ。それで休めない。

吉村：藤本さんが口籠ってる（笑）。

藤本：（笑）来年からはちゃんときて、レクチャーやります！

一同：おおー！（大笑）

平沼：（笑）ようやく欲していた回答が聞けたような気がします。ひとつだけこの機会に皆さんへ相談したいことがあります。展覧会会場の中央に、盆踊りのやぐらのようにフロアレベルを 2500 程高くしたエリアがあります。もともとが大阪駅側からシップホールを見た時に、建物内で開催している U35 の看板を設置することや下段に設備エリアの確保からフロアレベルを高く設計したので



すが、高さを上げたことから、会期中、出展者のギャラリートークやイベントを開催する用途として利用することが可能となりました。でも、昨年までの出展者によっては、広報が上手くない人だと、名前が認知されていないことから、聴講者が全く来ないのです。つまりここにいるこのメンバーが、毎日、一人ずつリレー方式で、題して「わたしのU35時代」でイブニング・レクチャーをやると・・・

倉方：そ、それは、めちゃくちゃ来ますね！（笑）

平沼：展示会場場の平場には、150～250人くらいは入るとすると、やぐらの手すりをバタンと45度程度、開く可動式か、メタルワイヤーの手すり壁にして、レクチャーをしている様子をみんなの下から眺めるような、そんな構想案を実現してみたいなあ、と思うのです。

石上：やぐらの上部でレクチャーをしたら何人くらい入りますか？

平沼：上部は32席しかとれないのですが、周辺の余白エリアを含んで50名。このやぐらの手すり壁や下階にモニターなどを付ける工夫が要りますが、展示会場にも人を入れると最大300人は入るんじゃないかなあと思っています。若手や、展示会場への応援が目的ですから、事前申し込みを避け、当日の開場時間12時から整理券を配ると滞留時間が増えるのと同時に、若手のギャラリートークも見てくれるような流れがつかれます。

平田：アリではありますね。でも実際、ここにいるみんな相当、忙しい？よね。どうしても一日で

勝負を終わらせたい人たちだから、皆さんにもう一度このために、大阪に来ないといけないということの確認も必要になります。

谷尻：確かに。僕たちの世代前後の、関西の建築家を呼ばれるのはどうですか。

平沼：実は南港から大阪駅前に場所を移した2年目、つまり今から3年前に、dotや島田さん、前田さんなど関西の建築家にも協力をいただき、開催をしたことがありました。もしこの議論が、若手への応援の意味だけで、この会場で継続する展示会の来場者数を求めているのであればそれでも良いのですが、彼らの何かが決して悪い訳ではなく、コンテキストのないゲスト・イベントを入れても来場者は伸びないことがわかりました。

谷尻：なるほど。関西には建築家がいっぱいいるけど、地元だから逆に珍しくないこともありますね。

倉方：そうとも言えるのだけど、ここにいるメンバーは独立が比較的早く、皆さん20代後半～30代前半に、活動が知られていた。そういう意味でこの世代付近に、これほどスター性のある人たちは他にいない。

平沼：倉方さんと芦澤さんそして僕は大阪だから、皆さんの都合のよい曜日や時期に応じていただくとして、倉方さんと藤本さんの発案から一番、予定を決めにくそうな石上さん、どうですか？（笑）

一同：（笑）

石上：今だと来年のこの頃の予定は完全に空いております（笑）。平日の夜も含めた会期中にひたひた登壇していく、ということですね。

平沼：ポピュリズム的になる必要性はないと思いますがどうでしょうか。一度やってみますか？

平田：そうですね。でも僕らが取り組むことで、ひとつの建築的な、批評と作品を結びつける運動のようにもなるかもしれない。展示会の来場目標数値は、来年からで大丈夫ですか？

平沼：恐らく今年の希望設定数値の1万人には届かず、シンポジウムが2回あった昨年を少し超え



る程度。およそ 1.2 倍の 7.5 ～ 8 千人程度になると思います。この数値を基に、来年からの本格的な取り組み数値が設定されます。

平田：来年こそ、1 万 1 千人？

谷尻：相当、厳しい数字ですよ？

倉方：建築の展覧会として、できれば・・・叶えば凄い数字ですね。

平田：僕たちもいよいよ、かなり真面目にやらないとだめですね。でも今年で 10 回目というのに、今日のシンポジウムは、いつもよりも人が多く感じましたよね？

平沼：それは皆さんからの呼びかけから、それぞれが SNS での告知のおかげで、事前の応募申し込みが 700 人程度ありました。

倉方：でもその実績も、相当、素晴らしいことです。

平沼：運営では客席だけでなく、ホワイエも使われましたか？

AAF：U35 のシンポジウムでは、1 部・2 部制で休憩をすることから、多少の入れ替わりがあり、

ホワイエは使わない程度で済みました。前半のプレゼンに興味のある方、後半の議論に興味がある方にも分かれる場合もあります。

倉方：なるほど。だから客席の人が一部、入れ替わっていたのですね。それでも、約 400 人の座席最後列の後ろで、立ち見で見てくれていましたね。

平田：シンポジウムは会場の規模からこの程度が最高値としても、やはり展覧会会場の集客をどう高めるかというのは、あらためて大切に感じました。そして確かに、僕たちがギャラリートークをして、一日 300 人の増員が出たとしたら、確かにこの 10 人で 3000 人になる。純粋に、現在の来場者数にプラス 3000 人となるのかはわかりませんが、一度だけではないリピーターなど、僕なら何度か足を運ぶ人や友人や知人を誘う口実にもなりそうな予感もします。

平沼：建築に興味を持つ関西人に限定した人口は、首都圏に比べた割合として半数程度だと認知しています。特にメディアからの影響や効果などは、3 割程度と言われているようです。でも展覧会への来館者実数を求めた場合、毎日通う人がいてもいいことから貴重さが求められるのも地方ならではの意欲を沸かせるひとつの理由になるのかもしれない。つまり行っても行かなくても良い時間限的なイベントより、毎年、比較のできるような継続的なものの方が、常連が付き盛り上がるひとつの理由となりますね。

石上：そしたら、ここにいる 1 人あたり、300 人ノルマということですね。

平沼：いや、多分それはそれ程、大変な数ではないように思うのです。

五十嵐太郎：そこはそうですね。この積水ハウスや丹青社、パナソニックなどの企業は、ギャラリーイベントで何をされているんですか？

平沼：若手を応援するような企業の方たちが、自社の若手写真やインターン制などの教育活用の一環として、建築系のイベントをされています。つまりはインディペンデンスで活動する建築家たちの活動や解き方を知る機会として、この展覧会にご助力をくださっています。

五十嵐太郎：それは社内向けとしてですか？

平沼：決して一般向けの B to C ではないですね。B to B のものばかりですね。

五十嵐太郎：それは何人くらい来ているんですか？

平沼：ユニオンさんなどが、B to B での取り組みをされていましたが、苦戦されていたのが実情です。ただシェルターさんのように、アイデアコンペの一次審査をあのやぐら会場で実施されたケースは、学生たちが多く集まりました。もしかすると極端化した思考性で考えた場合、南港に戻るということを想像した場合には、来場者を気にしないで開催できるというメリットも伺えますね。

一同：わっはは（笑）。

倉方：今のこの高揚感も全く失いますね。（笑）

平沼：（笑）2020 年となる来年、東京での夏のオリンピック以降、大阪は 2025 年の万博や IR、そして隣接するうめきた二期の期待感があるものの、僕は、その催事に焦点をピタッと合わせてしまうことを、やや否定的に感じています。時期や通過点とした目標を立てるのに役立つのは良いことだと思いますが、その催事後にも続けていこうと思うと、以降の条件が相当、厳しいことになると思うのです。だからその波及効果がないこの時期に、自力のプログラムを持っておきたいと思うのです。

藤本：確かに。実際に超えられるかどうかという問題はありますけど、アイデアはとても良いと思いますね。皆さんもきっとそう思われている様子です。

平沼：実行してみましようか？

藤本：えっ。まあね、平沼さんの言うことを聞かないわけにはいかないですからねえ。

平沼：じゃあ毎日、パトシリレー方式のイブニング・レクチャーをするということで良いですか？

五十嵐淳：今日のように皆さんが一堂に会した議論をして、それ以降の会期中にもう一回単独のレクチャーをするということですよ。

倉方：そう、この時期にもう一回、大阪に来てください。

五十嵐淳：僕は一番遠いから、このシンポジウムの翌日でいいでしょう！

一同：わはは（笑）。やる気になってくれました。

平沼：最後に一番、予定を取りにくそうな、石上さんはいかがですか？

石上：ええ、まあ、大丈夫です（笑）。

倉方：なぜか、相当、口籠っていますね。

一同：アハハ（笑）。

平沼：レコーダーがこのテーブル中央に置いてありますので、この会話を記録して図録に載せてまいります。もし嫌だったら今、言ってくださいね。

石上：いや、嫌とかはなく、僕はいいんだけど、このメンバーの皆さんの方たちが、相当お忙しいから大丈夫かなと思って。えっ、今決めるの？（笑）



倉方：皆さんがどう仰るのかなぁ、みたいな振りで、凄いかわし方をしていますよね。

石上：いや、いや、僕はもう一回、この時期に大阪に来るの、大丈夫ですよ！

平沼：はい！それでは決定として、来年より会期中の毎晩、バトンリレー方式のイブニング・レクチャーをやってみましょう。皆さん、どうぞよろしくお願いします。

一同：はい！

U35 2020 開催期間 展覧会会場 イブニング・レクチャー<予定>

(10月)

16日(金) 藤本壮介 (ふじもとそうすけ)

17日(土) ●シンポジウムⅠ A50 10名の建築家・史家

18日(日) 五十嵐淳 (いがらし・じゅん)

19日(月) 平田晃久 (ひらた・あきひさ)

20日(火) 谷尻誠 (たにじり・まこと)

21日(水) 倉方俊輔 (くらかた・しゅんすけ)

22日(木) 吉村靖孝 (よしむら・やすたか)

23日(金) 五十嵐太郎 (いがらし・たろう)

24日(土) ●シンポジウムⅡ 伊東豊雄 (いとう・とよお)

25日(日) 石上純也 (いしがみ・じゅんや)

26日(月) 芦澤竜一 (あしざわ・りゅういち)

平沼孝啓 (ひらぬま・こうき)

——— 最後になりましたが、引き続き今年の応募条件をこのまま、独立した U35 (35 歳以下) の若手建築家を募ります。そしてこれから応募をしてくる若手の皆さまへ、この 10 会議の兄貴役の五十嵐淳先生よりアドバイスをいただけないでしょうか。

五十嵐淳：そうですね。だんだんと、ここに出展してくる若手の皆さんの実力が高くなってきて何かの文句がある訳ではありません。ただ期待がある分、何か、物足りないというものも同時に持つのです。

平沼：それは恐らく会場にいた方たちや、ここにいる皆さんが共有していると思います。

平田：そう、何なんですかね。彼らの姿勢の持ち方というか、向き合い方。

倉方：今年はちょっと違うモードへ変化してきたように思います。

五十嵐淳：そう実際、上手じゃない。特に、平沼さんが推した福岡の百枝さんや、倉方さんが最終的に決めた金賞の秋吉さん、十分に実力をもつ方だと思えます。僕が推した伊藤さんだってもっと良くなっていくと思えます。

藤本：僕は五十嵐淳さんが開口一番に指摘した秋吉さんへのコメントは、さすがだと思いましたね。

五十嵐淳：彼はそういう説明をしていたじゃない(笑)。だからこそ、宣言して欲しかったのに、



ビジネス的なニュアンスの発言にイラッとしました。

一同：(笑)

藤本：(笑) その残念さは、みんな共有していましたし、あの感じでグイグイまた言ってやって欲しいなあ。彼らにとっても良い経験だし、出展したことの収穫を得られます。

五十嵐淳：そういう役割を求めるのはやめてください (笑)。でも推薦枠がなかった頃に出展していた、増田信吾や米澤隆、大西麻紀あたりは、その部分をしっかり頑張ってロジックで話してくれていましたよね。あっ、増田大坪は、来年ギャラ間展を開催するのですね。そういう活躍を見るのは、うれしいですね。10 年前は U30 というのもあって、彼らの考え方に迷いがありましたが、よく分からなかった部分がだんだんと成熟していく。僕は個人的にもこの展覧会がきっかけで付き合いが生まれて、東京に行く時に呑むようになって、どんどん成長していった経緯を知っています。だからかな・・・推薦枠というのが良いのかなぁとったりしたんですけどね。全部応募で良いんじゃないかなぁとも思いながら、でもそうすると集まらないということなの？

平沼：集まらないというか・・・

五十嵐淳：応募者の質？クオリティが低下するの？

平沼：推薦枠を設けることになって今年の出展者で 2 年目となりましたが、この 2 年間に質が上がったことと、勢いが増しました。公募枠だけだと、建築士と建築家の職能の違いがあるように、設計者が保持され大切にされている思想の方向が、やや違ってくる傾向です。でも今年なら、伊藤さんや、高田さん+八木さんの 2 組が公募枠から選出されましたが、十分に実力があり、推薦枠の人たちとの差はありませんでした。僕たち上世代の推薦が十分な訳ではありませんし、特に海外で活動をされている方たちを見つけ出すのは難しい。でも、来年用に今回、皆さんが推薦を出された時にも苦労をされたように、推薦する人を探すにも限られてくるんですよね。だから上世代の僕たちが、日常に下世代の活動を見守るような姿勢を持っていくようにならないといけませんし、そのような土壌をつくることで、下世代がこの年齢になるようなときにも、将来の建築界がまた明るくなると思います。

五十嵐淳：なるほどですね。

芦澤：推薦者を上世代があらためて探すことは良いことだと思うのですが、推薦枠から何組選ばないといけなというの別にはいらぬような気がします。推薦はするけれども、公募とフラットに勝負させて良いものを選ぶというのが平等のように思います。

倉方：いや、今年の審査委員長を担当してみましたが、公募枠と推薦枠を比べると、さすがに皆さんが良いと思い推した人たちだけに、推薦枠の方ばかりからの選出になる可能性が高いのです。だから推薦枠の上限というのはあった方が良いと思いました。7 組中 7 組が推薦からの選出者となると、公募で応募してくる人がいなくなります。

芦澤：そうね、上限でしたね。

倉方：そうすると上限はあっても良いけど、下限はなくても良いかなと思います。

藤本：誰が誰を推薦したというのは、これまであまり表に出さなかったもので、しっかり出ているなぁと思ったんだけど、それはどういう経緯だったのでしょうか。

平沼：昨年の推薦枠での選出をすることを議論した 2017 年に、当時の審査委員長の太郎さんとの話の中から生まれました。ヴェネチア・ビエンナーレの日本館展示の選出方法を事例にあげて、そもそも



審査のやり方がブラックボックスの中に入っているから、ディレクターの選出方法も、出展者たちも分からない。そういうのを表面化した方が良い時代じゃないかな、となりました。僕らの世代から後進者の時代性に合わせて、少しずつでも建築界を変えていく。そういう意図から、皆さんはわざわざ同日時に大阪に集まり、出展者の展示を2時間近くみて4時間以上もシンポジウムを開催した後に、休憩もなくビールも我慢して、この10会議で議論し発言した内容をレコーダーで収録し、翌年の図録出版の巻頭に掲載していくようになりました。

藤本：なるほど、僕が休んでいる間に、よい方向に進めてくれていた訳ですね、申し訳ない（笑）。

一同：（大笑）

倉方：推薦者の数は当年の審査委員長を外し、1人1つの9つでしょ。もしかするとそれを減らしても良いのかな。今のところ推薦枠の上限を、3〜4組としていると、半数は落選していきます。それはそれで少し申し訳ないみたいなのところもあるから、ここを減らす方法を探るのはどうでしょうか。

谷尻：いや、ただ推薦する僕らの情報も曖昧で、元スタッフを推したとしても実際の今がわからない。つまり思いがけず選んだ人が全然ダメだった、という率を減らすという意図もあるわけですよ。展覧会が出展者ばかりでなく、建築に興味を持ち、見に来てくれる皆さんのものであるならば、僕たちは同業の後輩のことばかりを考えるのではない配慮が必要だと思います。

倉方：うんうん、さすがにそうですね。でも絶対、推薦枠はあった方が僕は良いと思います。

平田：僕もこの推薦枠はやっていくべきだと思います。だったらシード枠を失くすというのはどうですか？推薦枠が狭き門になっている分、結果として展示のクオリティが高いのだと感じています。

谷尻：確かにシード枠は、金賞者にとって、あまり喜ばれてない感じもしています。

平田：1年で燃え尽きている。

一同：（笑）

倉方：シードはそもそもなぜ、導入したんだっけ？

平沼：（笑）もともとは、初年度のU30を開催するのに、出展者を探したところ、20代の独立した建築家を塚本さんや手塚さんなど、大学で教鞭を執りながら実務をされている先輩建築家にお聞きし、全国で活動をはじめたばかりの若手の20組ほど候補者を探るところから始めました。アトリエを尋ね歩きプロジェクトを見せてもらい話すと分かり易いものです。その中から7組を選出して2010年に開催しました。展示をしてもらうとまた分かります。人柄もそうでしょうが、建築への想いのようなものが伝わり、仕事量や大きさではなく、20代でも、面白い考え方をもつ若手に出会います。それが先ほど淳さんが話された、大西さんや米澤さん、増田大坪たちです。その頃はゴールドメダルの設定もなかったものですからシードもなく、開催期間に考え方を聞く時間も多かったことから、翌年の出展もしていただいたのです。つまり公募を半数、連続出展者半数というようにです。だからこの当時の出展者たちは、2〜3年、連続で出されていましたことから、上世代の交流も深まったと記憶しています。

五十嵐淳：そうだったね。だから毎年、成長過程を知ることになったんだって（笑）。

平沼：（笑）近年では2016年、淳さん審査委員長を務められた際に、金賞を渡す条件に、施工中だった酒井さんの教会の竣工の状態の確認をしたいというコメントを残され、翌年この金賞が確かか、別のプロジェクトでもあなたが金賞に値するかどうか、確認させてよ、ということで、シードを与えたことが発端で導入していったように記憶しています。そして翌年、2017年の審査委員長



を務められた太郎さんが、三井さんに金賞を与えられ昨年に続いたという経緯ですね。

五十嵐太郎：三井さんはとても頑張って連続受賞を目指したけど、昨年の審査委員長、平田さんの時に、中川さんに伊東賞とのダブル受賞を持っていかれましたね。

五十嵐淳：昨年の中川さんがそうだったからかもしれないけど、今年、秋吉さんがもし辞退したら、実質無くしてもいいんじゃないの。

倉方：でも壇上のあの様子を皆さんと来場者と一緒に共有してしまうと、もう来年からなしでも良いと思ってしまいますよ。

五十嵐太郎：倉方さんがそこまで言うなら、逆に出して欲しいなあ。

一同：（笑）うんうん、出してほしくなってきました。

倉方：秋吉さんがシードを受けとるかどうかで、最後まで良い感じもします。それを彼がどう受け止めるのかでしょう。

平沼：じゃあ、秋吉さんが出さなかったから、もう無くすということで（笑）。倉方さん、秋吉さんともう一回、お会いしましょうね！それでは出展者も待っているはずですよ。打上げのビールに行きましょう！！（笑）

一同：（笑）はい！

—— 皆さま本日は、展覧会会場での各出展者それぞれの展示作品説明から4時間あまりのシンポジウム、そしてこの10会議に至るまで、午前中の移動から終日にわたり、本当にお疲れさまでございました。貴重なご意見と議論の場を設けていただけて深く感謝しています。最後となりましたが、この10会議でのプログラム変更を実施する来年のシンポジウムは、2020年10月17日（土）と決定しておりますので、11年目の開催は、新たな次の1年目として、これまでの10年を引継ぎながらも、また新鮮な開催となりますよう、どうかよろしく願いいたします。本日は、誠にありがとうございました。



U-35 2019シンポジウム会場の様子



U-35 2019シンポジウム会場の様子